産力を示している。一方、一平方㌔当り生産所得（所得密度）では、県平均に対し三五％と、土地生産性の特異性を物語っている。このことからも、土地基盤の整備等による土地生産性の向上が切望される。

今後の阿蘇地域の主導的役割を握る産業は、さらに大きく躍進が期待される畜産ならびに観光、それに林業と目される。

これら産業についての若干の問題点にはすでに触れたが、とくに畜産については、濃厚飼料の年間供給量のうち輸入飼料が五三％を占める現状にあり、これを一見しても酪農経営が拡大しない大きな要素をうかがうことができる。

県農試分場では地域農業に密着した研究が行なわれている

恵まれた草資源をもつ阿蘇の畜産は、わが国の北海道と並んで西南暖地における牛肉及び酪農製品の供給センターとして、国民経済的見地からの畜産の振興をはかることにある。

このため、優良な外国食肉種牛および乳牛の導入と在来種の改良をはかる一方、草地改良技術の一層の研究と機械化された省力畜産技術の開発に努め、安定した大規模畜産経営を樹立することにある。

一方、観光については、やまなみハイウェーの開通によって、国際的スケールの観光ルートとしての魅力をさらに増し今後も自然の美を求めて訪れる観光客は累増の傾向にある。

観光ルートの基盤となる道路、交通機関の整備の遅れ、各温泉地や宿泊休養施設の整備・近代化の遅れに対する公共投資と民間資本による一層の観光投資をあて、海に浮ぶ天草と一本の帯で結び世界的スケールに相応しい観光地としての開発をすすめる。

広大な原野の高度利用に明るい期待を……

このように、阿蘇地域の開発可能性は未利用資源とくに四万五、〇〇〇㌶に及ぶ広大な原野の高度利用により、開発地域のなかで最も明るい期待に満ちている。しかし、反面、開発の手が早急に及びかねる山岳へき地の問題や、開発の担い手となる若年労働力の流出など、真剣に対策を講じなければならない諸問題も現に存在していることを忘れてはならない。

このような阿蘇地域の特性を充分に認識して総合的見地から開発促進につとめることが、この地域の開発促進上の課題と考えられる。

阿蘇町にある県農業試験場同蘇分場では、現在普通作物、高冷地野菜、秋大豆の育種、それに加工そ菜などの生産安定に関する技術面での研究が着実に進められている。

今年の県下の稲作は、史上最高の豊作といわれているが、阿蘇地域でも平年より一五％程度の増収が見込まれている。天候に多分に恵まれたとはいえ、栽培管理技術の進歩も見落せない。例えば保温折衷苗しろ栽培の普及だ。この栽培法は、シマハガレ病が多いことで普及が遅れていた。分場では空中散布による広域防除の実験試験にあたり二回の航空防除で被害率は五％と殆んど完全に防除できることを実証した。労力不足、さらには遅植えによる冷害もこの保温折衷苗栽培と航空防除の結びつきで解消するなど、大きな効果を上げたわけだ。

現在、分場では、品質上等でないといわれている阿蘇米の品種改良に力を注ぎ、倒伏防止、適期刈取りのデーター作りにも懸命だ。

また、このところ、阿蘇山間部では高冷地の条件を生かして、環境期に出荷できるのが強みの高冷地を菜の栽培意欲が盛んである。分場では、播期、品種、薬剤、肥料など、種々の実験を重ね、カンラン、レタス、セロリの実験を重ね、カンラン、省力化などの確立を急いでいる。

このほか、アスパラガスを重点にした加工そ菜では、栽培上の難点であった茎枯れ病対策として病気に強いKBFやパラダイス

県農試阿蘇分場の役割

という新品種を、また、ダイホルン剤という被害を殺にくいとめる薬剤の選定に成功。

畜産でも、飼料作物の省力な収穫培から搾乳に至るまでの集約酪農を中心とした技術面の確立で、阿蘇地域の酪農に大きな役割を果たなど、阿蘇地域の農業に密着した研究機関として阿蘇分場の持つ意義は大きいようである。将来は、さらにリンドウや、アザミ、ツツジ、白樺などの観光植物の開発。また、阿蘇高冷地を機械化栽培し、サイロを利用した高菜漬の大量生産への足がかりをもつかんでみたいなど、分場の夢は果てしない。

よこがお

自主納税　あなたがつくる
豊かな郷土！

★畜産　ひらけゆく大草原

阿蘇畜産の方向

阿蘇は、約四万五、〇〇〇㌶に及ぶ広大な草原を有し、その広さは全国屈指だ。大集団を形成する雄大さは、わが国でも比類がない。いうまでもなく、これら牧野を基盤とした畜産が阿蘇の地域産業の代表で、とりわけ「あか牛」の発祥の地として現在、県内総飼育頭数の二七％が飼育され、生産仔牛の大部分は遠く、関東、東北方面にまで出荷されている。そして最近の肉資源の不足に対して、本県は数少ない供給地として、需要が殺到し、ますます脚光を浴びようとしている。

現況

阿蘇畜産の現状を克明に眺めるとき、時代を反映し、近年では飼育頭数も年々減少し、この対策が緊急な課題となっている。

もちろんこの現象は、全国的な傾向であるが、従来の和牛経営が、耕種農業の背景にあって、縁の下の力持ち的役割りで、使役利用の比重が高く、農家経済上のウェイトは極めて低かった。

したがって、農村の機械化、化学肥料の発達等、農村の近代化が進むにつれ、当然の結果として現れた現象といえる。

例えば、昭和三十九年度県民所得推計報告書の中で、農業生産額構成の状況をみると、県平均では、耕種部門収入は約八〇％、畜産部門収入一七・五％と低く阿蘇地域の差はさらに大きく、耕種部門八三％、畜産部門一〇％となっていて、県平均を遙かに下廻っている。このことは、阿蘇の畜産があまりにも単純な経営で、他郡市にみる用畜経営即ち、仔畜生産と、肥育事業の組合わせ等、複合方式の採用又は、酪農の導入等、近代化のための取り組み方が遅れた証拠といえよう。

牧野の素顔

（表一）に示すとおり、五町七カ村にそれぞれ分布しているが、地形的にみて、阿蘇山を中心とした北側すなわち、北外輪山上又は、山麓が面積も広く集団し、改良の適地も多い。又、横断道路を初めとして交通網も整備され、開発の条件としては極めて恵まれている。

一方、南外輪山麓及び山東部一帯は、地形が複雑で、規模も小さく、急しゅんなところが多く、交通網の整備も今からの感がある。利用は、各地区共、毎年八八夜（五月二日～十日頃）を境として放牧が開始され、九月～十月までの、秋風身にしみる頃まで行なわれ、阿蘇の風物詩となる。そして十月ともなれば、名物「刈り干し切り」がいつせいに開始される。

この繰り返しが牧野利用の実態で、阿蘇畜産の姿でもある。このことは観光的には誠に価値ある自然の姿であろうが、経営的にはゆゆしき問題であろう。

したがって、管理と名のつくものは、春の彼岸も近づく頃、いっせいに行なわれる野焼き、牧道、棚類の補修等で、草生改良的障害物除去政は、施肥等の管理は殆んど皆無である。牧野は年々荒廃の一途を辿り、土じょうの流ぼう、ガケ崩れかん木の繁茂等で、利用度を益々低くしている。

現在まで、約一、八〇〇㌶の改良した草地があるが、これも大部分が従来の野草地的利用管理がなされ、期待された程効果を上げ得ないことは誠に遺憾なことである。

（表1）町村別牧野面積と要改良可能推定面積

町村名	面積 牧野	要改良可能面積	40年度末改良面積	摘要
	ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール	
一の宮町	5,444	3,811	168	既改良内訳 模範施設 60
阿蘇町	8,807	5,783	468	
南小国村	5,314	2,556	270	大規模 190完
小国町	5,436	1,100	454	〃 210完
産山村	2,460	1,799	89	
波野村	2,722	1,005	72	
高森町	6,295	1,060	48	
蘇陽町	2,824	356	36	
白水村	1,053	239	36	
久木野村	1,311	147	63	
長陽村	894	455	30	
西原村	3,338	210	65	
合計	45,898	18,651	1,799	

<注> 要改良可能面積は、機械改良を前提とし、1団地10ヘクタール以上を見込む。

（表2）大家畜飼養頭数調（昭和40年度）

区分	乳用牛	和牛	馬	合計（単位）	摘要
阿蘇郡	1,933	20,285	2,763	24,981	1. ジャージー種 1,444 含む
熊本県	27,651	77,413	8,526	113,591	
比率	7％	27％	32％	22％	